

# 星 霜

太田商工会議所40年史



会議所会館全景

「題字」出典

商工会議所は設立以来変わらぬ使命を持っておりま  
す。それは日本の商工業界の発展であり、太田の商工  
業者の繁栄であります。多くの先人たちがそれに向  
かって努力研鑽し、幾多の辛酸を嘗めて参りました。  
人が変わり歴史が経過しても、その使命は不動のもの  
であります。今後とも商工会議所の大船は、その大目  
的に向かつて波濤を乗り越えて進んでいくでしょう。

第一高等学校（旧制）の寮歌「嗚呼玉杯」第四節は

花咲き花のうつろいて

露おき露のひるがごと

星霜移りて人は去り

梶とる舟師は変わるとも

我のる船は常しへに

理想の自治に進むなり

と謳っております。

会頭 本島 虎 太

（揮毫 本人）

## 発刊にあたって



太田商工会議所会館は昭和62年4月、太田商工業界の議員の皆様を中心として多数の方々の献身のご奉仕と県、市ご当局の特段のご援助により見事落成し、その後の経営も順調であり、産業界をはじめ幅広い活用をいただいております。誠に有難く厚くお礼申し上げる次第であり、欣快に存ずるところでございます。

さて太田商工会議所は明治の中頃より葉住利蔵翁を中心に商工業活動が興り初代会頭太刀川又吉氏以来40年を経過するにいたりました。その間、戦中、戦後の混乱のなか先輩各位の多大なご努力により逐年経済活動は旺盛となり幾多の辛酸を経て今日にいたりました。たまたま新太田商工会議所会館落成にも当たり、ここに記念史を発刊し先人の業績を記して後世に伝えたいと計りましたところ、議員全員の賛同をいただきました。

幸いにして塚原守通委員長をはじめ各委員の皆様、執筆をご担当いただきました茂木晃、矢島力、正田喜久、正田安司の諸先生、相崎元・玉置前専務理事、そして印刷装丁をご担当いただいた上毛新聞社各位の真摯なご協力ご努力によりまして無事に発刊することが出来ました。ここにつつしんで関係各位に深甚なる感謝の誠を捧げる次第です。そしてこの素晴らしい記念史を多数の皆様が折に触れ繙き先人の偉業に感激され、次代の貴重な指針として永く伝えられることを心からお祈りいたしましてご挨拶といたします。

太田商工会議所

会頭 本島 虎太

# 第 6 編

## 本島会頭時代

青年会頭本島虎太が会頭に就任以来、9期27年が経過しようとしている。若さと実践力、そして優れた指導力を持つ本島会頭は幾多の困難を克服して当会議所の発展・充実に寄与しつつある。時代の激しいうねりに時として翻弄されることもあったが、盟友・同志そして会員諸氏の協力と援助でみごとに乗り越え、今日の当会議所を築き上げてきた。

本編では本島時代の軌跡を多角的に描き出してみることにする。



太田商工会議所会館の全景

## 5. 学園紛争

昭和43年～44年は東大、日大をはじめとする大学紛争が起こり、全国115大学に波及した。大学の管理運営当局者と学生・教職員との間の対立・抗争で、バリケードによる大学封鎖、教室等の占拠など暴力的に大学の機能を妨害した事件であった。機動隊導入、放水・火災ピン・催涙ガスの攻防などテレビに映し出されて注目を集めた。これは次第に高校へも波及し、服装・校則の自由化を求めてひと騒動あったものである。

その他耳目をそばだたせる事件は多いが、学校でのいじめ・校内暴力・非行などは地域や父母、先生の心配の種である。

松 籟

### 3代続いて会頭選任にかかわる

(元副会頭) 常議員 西田家隆

初代太刀川会頭の後任を決めるにあたり、旧実力者支配から若い世代に政治・経済の流れを変えようという運動が起きた。その代表として水谷会頭が実現した。封建時代から水谷時代即ち民主主義時代への移行である。いくなれば協調融和の時代であったろう。代わって黒川会頭が後を継ぐ勇猛果敢な性格である。静から動へ、会員はそういう転換を希望していたのである。そのあまりにも直進的な言動に辟易した会員が今度は清新な本島会頭の出現を呼ぶのである。若い獅子の登場であった。どういう訳か私はいずれの会頭選出にもそのインサイドにかかわり、当事者に諾否の意向をきくのはいつも私がうけもった。こうして時代の要請が異なった味をもった会頭を誕生させていくのであった。

## 第2章 本島会頭と商工会議所の運営

### 第1節 青年会頭の登場とリーダーシップの発揮

#### 1. 西のケネディ、東の本島

**本島青年会頭の登場** 1961年（昭和36）1月、米国史上2番目の若さのジョン・F・ケネディが43歳で米大統領に就任して、アメリカに新風をまきおこした。そして、2年後の1963年（昭和38）11月、彼は遊説のためテキサス州ダラスを通行中に3発の凶弾を受けて、46歳の生涯を閉じた。ケネディ在任中の中間年が昭和37年（1962）にあたり、この年、太田に青年会頭が誕生した。

昭和37年11月24日、37歳の本島虎太が史上最年少で第4代太田商工会議所会頭に選ばれ、その任に就いた。若さ、清新、期待感そして意外性を併せもったこの人事は各界各層の喝采と祝福をもって迎えられ、太田スズメは「西にレーニン、東に原敬」の人物対比に擬して「西のケネディ、東の本島」と評したという。

本島会頭かつぎ出しにはどんな背景があったのだろうか。1つは前会頭黒川が3選を拒んだこと、また、人心も深慮にして端正、手堅いリーダーを望む空気となっていたこと、さらに、旧会館建設の残務処理が残され、企業主も自分の会社・商店の経営に手いっぱい、会頭への食指はひっこみがちであったことなどが考えられる。ちょうどその頃、本島は太田ロータリークラブの若手オルガナイザーとして知られるとともに太田の旧家本島家という氏育ちと本島病院の隆盛・発展に手腕をふるっていたこと、田島市長以下も着目して信頼があったこと、相崎専務がかわいがり、何かと会議にひっぱり出して会議所に入出入りさせていたこと、さらに、発想が雄大で仕事は着実という特質をもち、礼節にも厚いこと、合理的思考と果敢な実践力とリーダー性をもつことなど、まさにうってつけの人物であったといえよう。



本島虎太氏

本島の人柄、プロフィールをある人は次のように述べている。

上述の外「東西の故実に通じ、合理的完全主義を求め一方、ユーモアを解し、果敢で進取的精神の持ち主である」。またいう。「事業欲旺盛で自ら進んで手がける。真面目で、大柄な体軀をもちながら、きめ細かな配慮を人一倍めぐらす。実父を早く亡くしたため、若い頃からの苦労人で他人への思いやりが深い。ゴルフはやるが運動（スポーツ）はやや不得手。神社・仏閣・故事に興味をもっており、よく知っている。煙草はやらず、酒はやや強い」。

ご本人は、「趣味はほとんどないが、歴史探訪や絵画（特に日本画）鑑賞、ゴルフなどは好きだ。食べものは洋食・日本食とも興味があり何でもいただける」と語る。そして、「私が若くして会頭という重責を果たしてこられたのは、副会頭・専務さんの親身の援助の賜であった」と謙虚に話す。

**太田の旧家・本島家** 本島本家は代々医業を継いで350年にわたる旧家である。初代は高祖・本島数馬と称し、承応3年（1654）12月10日に逝去している。法名は忠誠善智信士。2代七左衛門、3代嘉右衛門、4代目から自柳を襲名し、現本島病院長本島自柳（珪三）まで、12代（自柳襲名9代）を数え、13代悌司が現在後継者として活躍している。

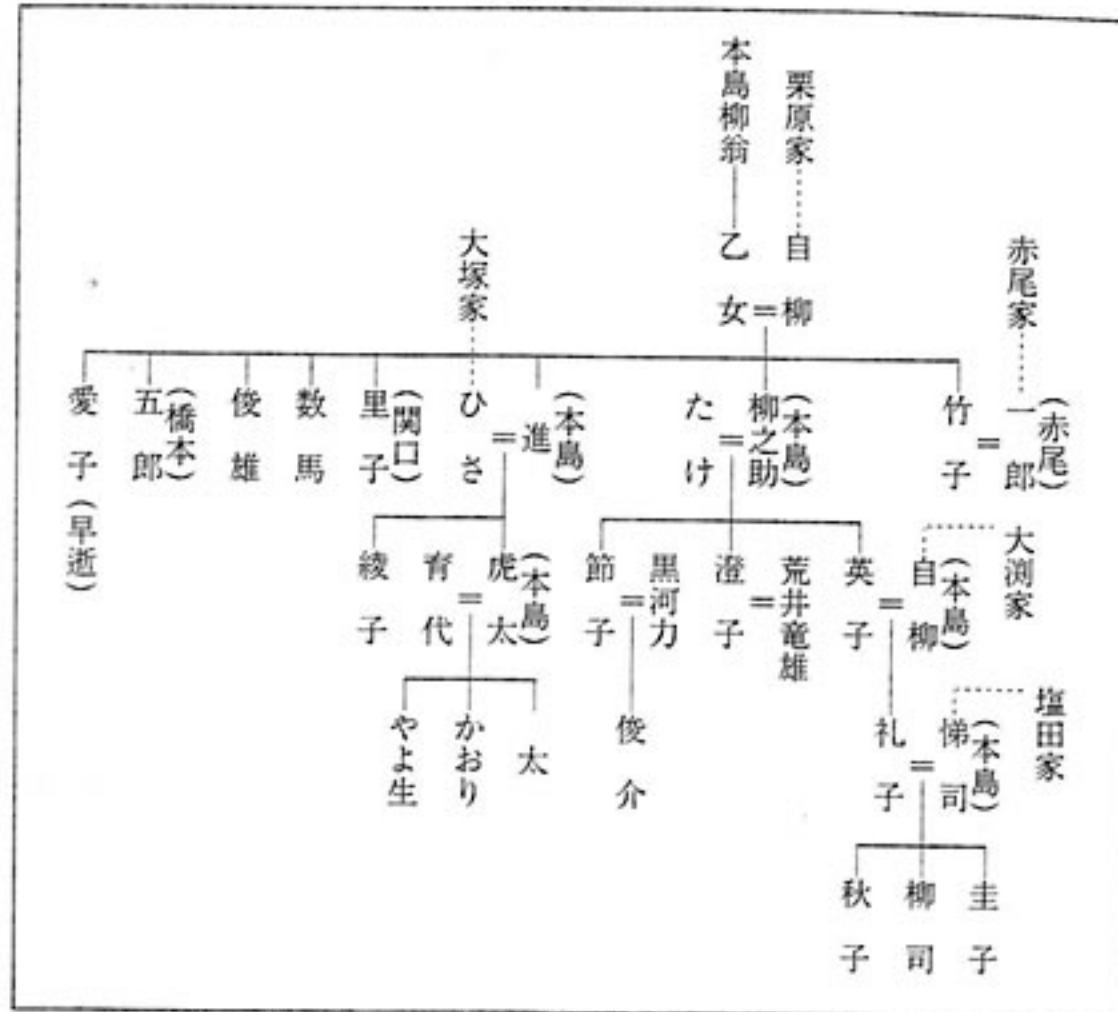
明治期以後の本島家略系図は右の通りである。

本島柳翁は自柳第6代で維新回天の激動の中を憂国の士として生き、医業に加え政治家として活躍、県会副議長となった。7代自柳は現埼玉県妻沼町の栗原家より入り、医業の傍ら県会議長の要職、県医師会副会長などの公職をこなし、現群馬銀行の基礎づくりに取締役として活躍した。その長女竹子は赤尾一郎と結婚。一郎は旧制第五高等学校長・新潟医大学長で整形外科学の権威として知られた。長男柳之助は自柳襲名をきらい、柳之助で通した放射線医学の泰斗、東京医大教授。現院長自柳は大淵家から入った外科学の専門家で医学界、医師会、県教育委員会委員など重職を担って活躍

している。

さて、本島会頭家は第10代自柳の次男で柳之助の弟として生まれた分家の進家に始まる。進は明治29年生まれで、大正10年京都帝国大学経済学科を卒業し、同年東京電力に入社、葉住利蔵の女婿新井章二が支店長をしていた前橋支店に勤務した。大塚家出身のひさと結婚して虎太・綾子の二子をもうけた。

本島家略系図



オピニオンリーダー 会頭本島虎太は父進、母ひさの長男として大正15年（昭和元年・1926）12月15日に生まれ、太田小、太田中学を経て昭和24年、旧制熊本第五高等学校（現熊本大学）を卒業した。同29年より本島病院に勤務して理事・常務理事等を歴任、(株)有隣社（薬局）代表取締役を務める。同37年11月24日、太田商工会議所会頭に推挙され、以来9期27年にわたり同職にあって現在に至る。この間、同46年には太田都市ガス(株)代表取締役となり現在に至る。その他の重要な公職歴として、同45年～

松 籟

### 職業を通じて社会の輪へ

議員 服部 政 美

ちょうど40年前、3丁目に事務所を構え、まずお世話になったのが太田商工会議所でした。太田に来て間もない私は、街の事情、経済界の情報等を勉強すべく相崎専務以下職員の皆さんもうるさいと思ったに違いないほど足繁く通ったものでした。

また市役所商工課・税務課には大変厄介をかけました。人は社会の中で陰に陽にまわりの方々の支えによって生きてゆくものです。「職業を通じて社会に奉仕する」。これが私のモットーの一つでもあります。

57年東毛福祉事業協同組合理事長（第3代）、同46年より群馬県商工会議所連合会副会長（在任中）、同47年より群馬県教育委員会教育委員1期、同55年郷土産業振興協議会会長（在任）、太田地区電信電話ユーザー協会会長、同58年太田地区防火管理者連絡協議会会長などがある。同53年には群馬県知事功労表彰、同62年群馬県商工功労表彰受賞など、本島は多くの表彰に輝き、オピニオンリーダーとして活躍し、名士として知られている。家庭では1男2女の父である。

## 2. 9期27年の本島体制

**出発** 昭和37年11月24日、旧会館2階会議室に出席議員36名、委任状11名で開催された臨時議員総会は堀越副会頭が黒川会頭代行の議長となって議事が進められた。会頭選任にあつては選考委員として荻原八郎・米沢伸三郎・栗原正夫・小保方登美男・大野金四郎・武内有朋・鈴木米吉・田島源四郎・笹山好春の9氏が選ばれ別室で協議、その結果本島が最適任と決した。堀越議長はただちにこれを議員に諮ったところ、全員拍手をもって承認された。栗原議員の直ちに議場に迎えるべしとの発言によ



旧会館での議員総会の様子

り、自宅から会場に到着した本島は「皆さんの選任を喜んで受諾する」旨挨拶し、議長席に着き、副会頭に堀越金次郎・高橋孝雄・横塚清作の3氏を、専務理事に玉置行男を再任して、ここに第4代会頭本島体制が誕生し、輝かしい船出の時を迎えたのであった。

**役員体制の変遷** 会頭は9期27年本島が選任されている。副会頭は表に見る通り、上記3名から出発し、岡田徳次郎（昭和39.2.11～43.5.24）、荻原八郎（同42.3.28～43.12.2）、栗原正夫（同40.12.2～46.12.7）、西田家隆（43.5.24～52.12.2）、

本島時代の役員・議員数等の推移

	1 期 (昭37.11.24~)	2 期 (昭40.12.2~)	3 期 (昭43.12.2~)	4 期 (昭46.12.7~)	5 期 (昭49.12.2~)	6 期 (昭52.12.2~)	7 期 (昭55.12.2~)	8 期 (昭58.12.2~)	9 期 (昭61.12.2~)	
会 頭	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	本島虎太	
副会頭	堀越金次郎 39.2.11 →岡田徳次郎	高橋孝雄 42.3.28 →萩原八郎 岡田徳次郎 43.5.24 →西田家隆	栗原正夫 西田家隆 大嶋一郎	西田家隆 大嶋一郎 橋本見吉	西田家隆 大嶋一郎 橋本見吉	大嶋一郎 橋本見吉 松月仁志夫	松本恵介 鈴木清一 武川 敦	松本恵介 鈴木清一 高岡良次(死去) 59.3.31 59.9.19 →石川清一	松本恵介 鈴木清一 石川清一	松本恵介 鈴木清一 石川清一
専務理事	玉置行男	玉置行男	玉置行男	玉置行男	玉置行男	玉置行男	玉置行男→参与 56.9.1 57.1.12 →柳 佳治	柳 佳治	柳 佳治	
監 事	山口清次 小宮正三	小宮正三 高荷宗一	飯田金太郎 服部政美	新谷哲夫 粉川 純	小田切増吉 柄沢利泰	岩原昭 早部英也	鯨井洋 湯浅正幸	林進三 井部肇武	秋田誠 神林茂男	
常議員数	15人	15人	45.10.22 20人	20	20	20	20	58.3.17 30人	30	
議 員	32人	32	45.3.30 38人	38	38	38	38	58.3.17 46人	46	
数	20	20	26人	26	26	26	26	31人	31	
	8	8	11人	11	11	11	11	13人	13	
合計	60	60	75人	75	75	75	75	90人	90	
定款改正 その他	地区改正	横書の定款となる。 事務所々在地町 名変更。	選挙権、役員等 の改正規程	特定商工業者の 範囲	大幅な定款改正		総会議事、書類 の備付義務、関 覧規程。 役員、議員総会、 部会改正。		負担金改正。	



会議中の三役

大嶋一郎 (43.12.2 ~ 55.12.2)、橋本見吉 (46.12.7 ~ 55.12.2)、松月仁志夫 (52.12.2 ~ 55.12.2)、松本恵介 (55.12.2 ~ 現任中)、鈴木清一 (55.12.2 ~ 現任中)、武川敦 (55.12.2 ~ 58.12.2)、島岡良次 (58.12.2 ~ 59.3.31死去)、石川清一 (59.9.19 ~ 現

任中)らが選任され、本島体制を支えてきた。

専務理事は玉置行男が当初から昭和56年5月31日まで本島体制7期19年を支え、翌年1月12日より現専務理事柳佳治に替わった。玉置は参与となった。

監事は2人を定員とし、その職務は本会議所の業務及び経理を監査、その結果を議員総会に報告することとなっている。歴代監事は前ページの表を参照されたい。

常議員数は15人定員から出発して、20人 (昭和45.10.22~58.3.17)、30人定員 (同58.3.17~現在)と増員してきた。また、議員数も1号32人、2号20人、3号8人、計60人で出発したが、定款の変更に伴って常議員数と同様の変遷をし、75人体制から現在は、1号46人、2号31人、3号13人、計90人となって重要事項の審議・決定に大きな役割りを果たしている。

定款の改正経過をみると昭和38年、宝泉合併に伴って地区規定改正。同42年には定款横書き式への変更、事務所所在地を住居表示の変更により変更、総会招集規定の改正を行った。同46年は選挙権、役員・総会・議員の規定を改正。翌47年には特定商工業者の範囲を改正。昭和51年5月総会では大幅な大改正が行われ、現定款の基礎が固まった。その後は同57年に総会議事規定、書類の備付・閲覧規定、同58年に役員・総会・議員・部会に関する規定の改正、62年には負担金規定の改正などが行われ現在に至るのである。

リーダーシップの発揮 若くて清新、気鋭の本島会頭は旧会館の事後処理や会館隣

接地の土地購入、会館増築などの事業を着々と遂行して、有能な経営力を見せた。次いで、後述するように、時代の流れに即応した定款の改正の実施の中で、部会や委員会の改編、財政の健全化と安定化、新会館建設、商工業の振興策、会員の親睦増進、福祉向上策の提言・実施、調査・研究の推進、意見具申・建議活動の展開、事務局の充実と改善・合理化の実施、県や市・関係機関とのコンタクトを深め、連携を強化、さらに文化活動の展開など、多くの実績をあげ、リーダーシップを発揮している。

**会頭の施政方針** 次に会頭の施政方針を事業計画書からピックアップして採録しておく。

◦昭和38年度（会頭就任初期の方針）

近年社会科学の進歩と相俟って流通革命、企業合理化等々社会経済の変動は活発であり急速である。今や国際貿易の自由化等昨今の海外情勢の変化が直ちに太田地域に影響し反応する時代となっている。国際間の変動を対岸の火として拱手展望する時代は過去のものとなった。我々は常に周囲の社会経済状態を的確に把握し、各種企業診断等科学的に情勢分析を行い、他都市に先駆し大胆且つ慎重に新たな方途を講じなくては常に後塵の敗北に苦闘しなくてはなるまい。

本年度はこの観点に立脚し、社会経済情勢の診断分析に力を注ぎ且つ基本的、社会的福祉諸施設の建設を促進し、太田商工業発展の基礎を固めたいと考えるものである。

◦昭和50年3月の方針（大型店問題で揺れる）

物価の狂乱は一転して深刻なる不況の時代となった。品不足に驚き、物価高に動転したのも夢の如く過ぎた。今や需要の抑制は大企業は勿論中小企業をして恐怖の底に容赦なく引きずり込みつつあります。商工会議所はこの事態に対処する為、微妙に流動する経済状況を見つめつつ、短期的且つ長期的展望に立って機敏に勇敢にそして強力な手段を駆使してこの未曾有の重大危機を乗り越らなければならない。そして今こそ地元商工業は近代的経営へ向かっての脱皮の1つのチャンスであると断じたい。

◦昭和56年度の方針（会頭選挙の翌年）

中東諸国の政治的不安のなかにあって、又円高にも拘わらず日本の輸出ドライブは旺盛であり、EC、米国等々の日本製品の輸入に対する危機感は強まりつつある。一

方国内においては、物価は一応安定化の方途を辿りながら、増税、高金利負担等々による不況感は払拭できず、急速な近代化の波は中小企業に重圧としてかかり、各種の分野で苦戦している。

我々は中小企業の体質の強化のため、基本的な指導と大局的な判断のもとに一致して強力な擁護策を展開すべきである。

### 3. 記念式典と会員大会等の挙行

**会議所法施行10周年記念式典** 昭和38年（1963）11月3日、太田小学校講堂において、新会議所法施行10周年記念行事が行われた。時あたかも市制15周年にもあたっていた。500名の参加を得て、午後1時から、会員相互の結束と連絡協調を図り、商工業の発展を企図するねらいで、3部構成で実施された。1部は10周年式典。2部は永年勤続優良従業員の表彰式。そして、3部はアトラクションとしてキングレコード舞踊団の舞踊・高林出身の古都清乃とその楽団による歌謡曲・民謡がにぎやかに上演された。

**太田商工会議所創立25周年記念式典** 昭和47年（1972）10月13日、真新しい太田市民会館大ホールにおいて、25周年式典が挙行された。今日までの4分の1世紀の足取りを反省するとともに将来を展望して新しい時代の新しい会議所に脱皮する契機としたいと本島会頭は宣言した。参加者1,600人、永年勤続従業員表彰を受けた者632人であった。

開会宣言のあと国歌斉唱、本島会頭・戸沢太田市長・記念行事特別企画委員長の挨拶とつづき、物故役員・議員・会員に対し黙禱を行った。以後は設立以来の役員、議員10年以上勤務者への感謝状贈呈・同謝辞、永年勤続優良従業員表彰・同謝辞、来賓祝辞、記念講演：藤原弘達「最近の政治経済」、アトラクション、ラッキーカード抽選というプログラムであった。

**昭和59年の会員大会** 会員大会は昭和37年以来、2年ごとに優良従業員表彰、アト

ラクションを加えて実施してきたが、同47年度までで休止。同59年から新たに3年に1度に変更されて実施されている。

同59年6月29日、今回に限り会頭が議長になって前段に会員大会を実施し、大会スローガンを決議した。会場は市民会館、参加者は645名であった。スローガンは次の通り。

1. 商工会議所会館の早期建設を推進しよう。
1. 会員の総力を結集し地域経済の発展をはかろう。
1. 地場産業を育成しよう。
1. 文化のかおり高い街づくりをすすめよう。

このあと表彰式、由美かおるショーが行われた。同62年10月4日は式典は行わず「会員のつどい」として、表彰式とアトラクション（お笑い名人寄席……三遊亭円楽、内海桂子・好江他）が行われた。式典は市役所主催の形で進み、「太田市中小企業永年勤続優良従業員表彰式」の名称で市民会館で行われ、そのあと上記の「つどい」となったのである。

#### 4. 群馬県商工会議所連合会議員大会

群馬県商工会議所議員大会は昭和35年を第1回として前橋で開催され、以後10商工会議所が順次主催者となり、主催商工会議所所在の市において開催されてきた。

第6回の大会は当商工会議所が担当し、昭和39年10月1日に東京三洋電機(株)の健保センターで行った。

過去の大会をみると形式的に行事が行われる感があり、また議決機関でもない存在で、年々低調となり魅力を失っていた。

そこで太田はできるだけ特徴を持たせ、多くの議員に参加していただくため、午前は東京三洋の工場見学を行い、午後恒例の大会を催した後に懇親会、ラッキーチェイス、そしてアトラクションとして藤本二三代ショーを行い大いに楽しんでいただいた。

また、第15回の大会は昭和48年9月10日に太田市民会館で行った。中味を濃くするため、午前中5つの分科会に分かれて各々のテーマを協議。多くの発言が出された。

その結果を午後の大会に報告し議論を交わした。また、東京三洋電機の黒河副社長の講演を30分セットし、大会終了後商工会議所全会員を招待して、豪華な景品があたる抽せん会や、宝塚花組歌劇公演を観劇して盛大なうちに終了した。

## 第2節 雨降って、地固まる

### 1. 揺れた昭和55年

**昭和52年の議員選挙** 天下泰平で四海波静かが理想だが、社会・経済情勢の変化はいや応なく人心をして波風を立たせるものである。昭和55年の揺れた会議所の前哨戦が同52年度の1号議員選挙であった。

昭和52年11月、本島体制6期目の1号議員選挙が行われた。定員38名のところ、8名オーバーの46人が立候補した。投票の結果、落選した8名は商業・サービス業者で占められたので、商業者のフラストレーションは極度に高まっていった模様である。

**会頭・専務解任要求** 昭和55年8月8日、常議員鈴木菊治・島岡良次を代表として36名の議員連署をもって、臨時議員総会の開催が請求されてきた。内容は本島会頭、玉置専務の解任を要求するもので、理由として、大型店進出攻勢の激しい折、会議所



大嶋一郎副会頭



橋本見吉副会頭

は地元小売業者側に立った対応策を講じてない、それは会頭・専務の責任であるというのであった。

2人の代表者に面会した大嶋一郎・橋本見吉両副会頭は総会招集権は会頭にあること、その前に常議員会の議決を経なければならないこと、もし意思が通

らない結果になった場合の問題などを話し、12月には役員改選があるのだから、その時に正々堂々の主張を展開すべきではないかとの筋論を述べた。

その後、結局8月18日に常議員会を開くこととなり、そこで会頭・専務解任要求は否決された。さらに、臨時総会の開催の件も話し合いで詰めて、同月28日、中止が決まった。

これから12月の総会、役員改選に向けて、要求側と受ける側は互いに4カ月の間、大義名分を確立し、作戦を練ることとなった。玉置専務も、感情論を混じえた会頭退任要求には、戦わざるを得なかったようだ。

**会頭候補2名 立つ** 同年12月2日は実に重大で緊張した一日であった。何しろ、初めての会頭選挙が行われる日であり、本島体制の存続か否かが問われる日だからであった。

会頭候補に、本島虎太現会頭、鈴木菊治常議員（太田商団連会長）の2名が立候補した。両陣営は秘策を胸に12月2日を迎えた。玉置専務は総会運営の舞台回しの責任者であったから議決方法、議長選出、多数派工作などに腐心し、最終的には専務職をなげうつ覚悟をしていたようである。

議決方法は起立票決とし、少数意見から先に票決して意思を確認し、そのあと多数意見の票決を行うこととした。議長は常議員会の実力者、炯眼にして果敢な岡野源太郎が議員中からの指名発言で決まった。

岡野議長は両候補の推薦演説を促した。まず鈴木候補を推す島岡常議員が発言。次いで本島会頭を再任したいとする主旨の発言を塚原常議員が行った。塚原の本島擁立の説明は穏やかだが明快な論旨で相手候補を十分かばいつつも大局的視野に立つ判断こそ必要であると、情と理を綾なした見事な語りであった。

続いて議長は採決法を起立か記名かと諮ったところ、起立とする者36名、記名とするもの24名という結果になったので、起立票決とする旨宣言し、票決に移った。票決結果は

本島会頭を信任するもの 43人

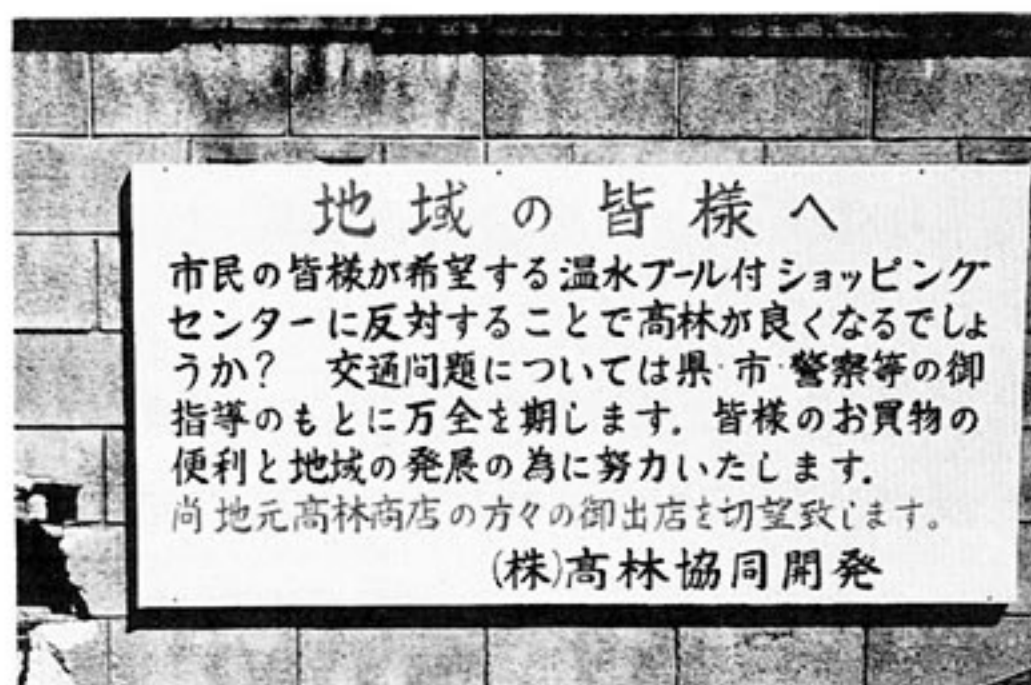
鈴木候補を支持するもの 15人

ということで、議長は「よって、本議員総会は本島虎太氏を会頭とすることに決しました」と宣言した。

本島会頭は7選を果たしたので、副会頭に松本恵介（松本樹脂工業(株)社長）、鈴木清一（大鈴メリヤス工業(株)社長）、武川敦（荻原石油(株)取締役副社長）を指名、専務理事には玉置行男を再任して承認された。

ここで武川副会頭の出現は合従連衡の所産であり、第3勢力の台頭も見逃せない情勢にあることを見てとり、これと提携する手段を選んだものといえよう。

**火種は大型店問題** 太田商工会議所設立以来最大に揺れた昭和55年時点、その背景は何であったのか。それは、大型店の進出と地元中小零細商業者の抵抗、反対運動に原因があり純粹の経済問題であるが、時として感情論に発展することもあったのである。昭和52年秋ユニバー・ベルタウン（太田ショッピングセンター）の出現から同56年



大型店出店者趣意書看板

6月の太田高林ショッピングセンター開店に至る5～6年間は大型店の進出が相次ぎ、地区商工会の中小商業者は危機感に陥り、生存をかけて反対する者、大型店とのドッキングで生き残ろうとする者など同業者内でも紛議が起こっていたのである。

**波紋** 本島対鈴木の会頭選挙はいろいろな波紋と後遺症を残して終わった。その主なものは副会頭人事であり、専務交替劇であった。

玉置専務は会頭選挙が決着を見たとき、「臣が事既に終われり、屈原のいざ帰るなむ、故郷へ」の心境になっていた。また、これとは直接の関係はないが、副会頭の交替、辞任、逝去などが相次いで、揺れる商工会議所を象徴した1時期であった。

## 2. 玉置専務から柳専務へ

本島会頭体制の第7期が発足し、玉置行男が専務理事に指名承認されてから、玉置は55年騒動の責任を感じて辞意を表明していた。翌56年3月25日の総会で、正式に専務辞任が承認された玉置は、退任の言葉を会議所ニュースにこう述べている。



玉置前専務の送別会

「会議所の中樞をあずかる専務理事は、その素晴らしい思考力と正鵠な判断力、重厚な信頼性を具備していなくてはならない。しかし既によわい65歳となり限界に至ったことを認識した。であるから、老兵はただ消えさるのみ」。

本島会頭は同年8月28日、ふじや会館で送別慰労会を催し、玉置をねぎらった。玉置は感慨無量、会頭の温もりに感謝したと述懐している。その折、中田武夫先生（元太女教諭）は「玉置専務を送る詩——バイプレーヤーの終焉——」という1編の讃詩を贈って労をねぎらい、明日への門出を祝している。

**玉置行男専務** 玉置専務は大正4年（1915）12月12日、太田町（現在太田市本町21-22）に父若葉、母千賀の長男として生まれた。太田小を経て、昭和8年県立太田中学校を卒業、同12年まで家業（旅館業）に従事していた。その後は兵役従事（昭和12～14年、同16年～18年の2回）、軍需工場中島飛行機勤務（同14年～16年、18年～20年終戦まで）をし、戦後は時代の激変の中で自営したが成果があがらなかった。同29年から4年間、東京の協立印刷に勤めたあと、同33年5月27日、相崎奎二前専務勇退のあとをうけて専務理事に就任して上述の同56年まで勤続した。同56年9月1日参与職に任じられて今日に至っている。

子どもの頃は腕白で喧嘩は強く、学芸会では主役にまつり上げられたという。中学

会頭・副会頭・専務理事



会頭  
株式会社代表取締役  
本島 虎太



副会頭  
松本樹脂工業株式会社取締役会長  
松本 恵介



副会頭  
大鈴メリヤス工業株式会社代表取締役会長  
鈴木 清一



副会頭  
株式会社いしかわや代表取締役  
石川 清一



専務理事  
柳 佳治

## 編集後記

40周年記念誌の制作会議で本島会頭は年史について幾つかの希望を述べたが、ドキュメンタリーなものと言ったのが印象的であった。そこで塚原委員長と執筆スタッフを依頼するにあたり、たいそうな肩書をもった方達を考えずに、太田っ子で同じ血のぬくもりをもった人達による豁達たる集団でつくり上げることがベターであると思った。それははじめて手がける会議所史に、むしろ新鮮な興奮を覚えて取り組んでもらえると信じたからである。執筆の先生方は、私どもが驚くほどポジティブな活動を展開してくれた。

本誌の構成は、会館新築と二連事業であると位置づけ、第1編は新会館落成を掲げ、茂木晃先生が担当され、第2編は太田地方の歴史と呼び、古代より現代に至る太田通史として第1章を正田安司先生、第2章は矢島力先生、第3章は正田喜久先生、そして第4章を茂木晃先生が分担された。各論に入り、第3編太刀川会頭時代を正田喜久先生、第4編水谷会頭時代、第5編黒川会頭時代は正田安司先生、第6編本島会頭時代を茂木晃先生がそれぞれシャープな眼で描写して下さった。第7編は資料編としてまとめた。

想えば池田晃委員の発意で東京商工会議所商工図書館の大島幸子館長のご好意からはじまり、上毛新聞社の柳田芳武出版局長はもとより、北村茂、富沢隆夫、末吉俊夫の諸氏の直言が懐かしく、会議所事務局員の陰の努力も忘れてはならない。

3編から6編までは主として、時の会頭に視点を当てた叙述になっているが、会議所の来し方40年を辿って、その折々に画いた風紋も分かり易く記したつもりである。

本史作成のねらいとしてなるべく多くの人に紙面を飾っていただくため、「松籟」とともに座談会を四つのパーティに分けて載せることにした。「外部から見た会議所」、「あの頃を語る」、「青年から見た会議所」、「40年史に託すもの」である。それぞれ持ち味のある発言をいただいた。特に婦人方のご参加を得て、外部から見た会議所を大いに語っていただいた。

表題は、私の乞いに本島会頭が『星霜』と命名し、揮毫にも応じてくれたのである。

太田商工会議所40周年記念誌委員会  
特別委員 玉置行男



最終打ち合わせ会議出席者  
(平成元年7月2日)



原稿作成打ち合わせ  
(記念誌編集室)